

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信 十七号

2009.2



第十六話 義に生きる

シリーズ
絵金百話

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2009年2月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mxi.netwave.or.jp
http://www.ekingura.com/



赤岡の芝居絵屏風

高知県文化財に指定！



2009年1月23日に行われた高知県文化財保護審議会において、赤岡町の絵金とその弟子たちによる芝居絵屏風23点を高知県保護有形文化財に指定するよう、県教育委員会に答申がなされました。

これまで県文化財に指定された絵画は5件、中世から近世初頭にかけて描かれた仏画が中心でした。そうしたなかで、幕末から明治時代の芝居絵屏風23点が一括指定されることはたいへん画期的なことといえます。

審議会では二曲一隻の屏風に芝居絵を描くという他県に例をみない絵金独自のスタイルと、本県に200点余り伝えられるこうした芝居絵屏風のなかでも赤岡の作品が技術的に高いことが評価されました。また、今後作品ばかりでなく、祭礼や土佐山田町をはじめ、他の地域に残る芝居絵屏風の評価についても言及されています。

絵金の作品を守り伝えることが、私たちの生活と心を豊かにする、絵金蔵はそうしたイメージを様々な形で伝えてゆく場でありたいと願っています。



絵金屏風修復・保存活動へ —ご寄附のお願い—

赤岡に残る絵金の屏風絵23点は、幕末より祭礼文化とともに地域の所蔵家の手によって伝えられてきました。平成17年からは絵金蔵の収蔵庫に保管されていますが、約150年の時を経て、絵の具の剥落を中心とする傷みがあちこちに見られるようになってきました。

現在、赤岡では従来それぞれ活動していた4地区と個人の所蔵家がひとつになり「赤岡絵金屏風保存会」を立ち上げ、絵金蔵運営委員会とともに屏風絵とそれを飾る祭礼文化をより長く後世に伝えていくためのさまざまな活動を行っています。

どうか、赤岡の絵金屏風の修復・保存とそのため活動に、皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

赤岡絵金屏風保存会・絵金蔵運営委員会

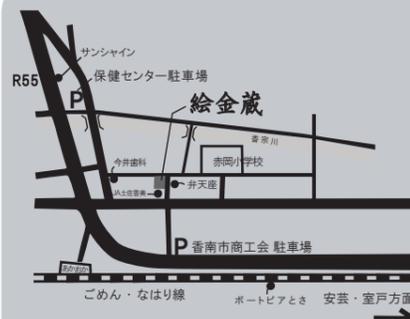


土佐香美農業協同組合 赤岡支所
普通口座 0006101
赤岡絵金屏風保存会 会長 武市徹
(アカオカエキンビョウフホゾンカイ カイチョウ タケチトル)

* 『蔵通信』発行日変更のご案内：『蔵通信』はこれまで隔月発行していましたが、諸般の事情により3ヵ月に一度の発行とさせていただきます。何卒ご了承下さいませ。

〔絵金蔵〕

開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)
観覧料
大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)
休館日
毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

：年に一度
：絵金の文化を
守るため
：伝承
：次の世代へ
伝えるため
：縁結び
：地域を超えて
世代を超えて

関所を破る唐木政衛門



次ページで紹介するシーンの前の場面。関所番人の娘と知ってお袖に近づく志津馬と利用されているとも知らず志津馬を家に連れ帰るお袖。美しい志津馬にぞっこの様子。

お袖の帰りが遅いのを心配しながら糸車をひきひき待つ母。

紙本淡彩「伊賀越道中双六」
香南市香我美町・吉川登志之氏所蔵

伊賀越道中双六

もうひとつの

平成21年1月20日-2月1日 絵金蔵主催 香美市立美術館にて開催 企画展「祝祭に捧げた夢—絵師金蔵の悦楽と悲哀—」

香美市立美術館をお借りして開催した本企画展は、おかげさまで2724人(12日間)の方にご来場頂きました。所蔵家のご協力はもちろん、個人・商店・地元企業のご寄附やボランティアほか、多くの方々の力によって、絵金蔵開館以来初めての本格的な展覧会を開くことができました。本展を準備の様から少しご紹介いたします。



部材に書かれた組立のための記号。「イ五」と墨書が見えます。



香美市・八王子宮遥拝殿をお借りして行った絵馬台の燻蒸。隙間のないようビニールが張り巡らされました。



展示前の作品状態チェック



ライティングによって鮮やかに、幻想的に手長足長絵馬台がよみがえりました。展示されたのは平成11年以来、10年ぶりです。



日本通運の美術専門スタッフによる屏風はめ込み作業。



燻蒸を終えた材を展示室で組み立てているところ。地元大工7、8人がほぼ一日がかりで仕上げました。



香南・香美両市の芝居絵屏風が初めて一堂に。



角度や他の絵とのバランスをみながら展示していきます。



展示室に組まれたイントレ。通常舞台上で使う装置を展示に取り入れました。中央には階段を上って会場を見渡せる「やぐら」も。

7月には県下各地で行われる夏の祭礼。絵金とその弟子たちが描いた芝居絵屏風を飾る夏祭りも各地に伝えられています。高知市西部の朝倉神社では山門状に組んだ絵馬台に屏風絵を飾ります。左下に見えるのが「伊賀越道中双六 岡崎」構図、色彩ともに赤岡の作品と全くといっていいほど同じものです。この画題と作品が広く庶民に愛されたことを物語っています。



高知市・朝倉神社の宵祭り風景



ここにも「伊賀越」が…



一演出家の言葉

本展では出品作品と全体の構想が決まりつつあった段階から、空間演出家の山本圭太氏に展示デザインを依頼しました。山本氏は平成20年9月より香美市立美術館で行われた「古仏との対話」展の際も演出を担当し、多くの来場者から高い評価を受けています。この絵金展も山本氏の演出なしにはありえませんでした。彼の絵金観、本展にかけた想いを伺いました。



絵金は人の「生死」を描きながら、それを楽しみ、遊びをも描き込んだ。彼は絵を通じて、生きる事への問いかけをしていたように思う。描かれた物語を知ることにより広がる世界はある、しかしそのことよりもまず、絵金という作家は、絵を描くことを通じて何をみていたのか、そのことを見る方々に印象付けたい、と思った。画家としての絵金の再認識がねらいである。

山本圭太 プロフィール：1980年生。空間演出家。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科助手。映像作品制作ほか、インスタレーション作品を多数発表。光をモチーフに創作活動を展開中。

二曲一隻屏風/紙本著色/184.0×167.0cm
赤岡町本町四区・門脇家蔵

— あらすじ —

藤川の宿で敵沢井股五郎に追いついた和志津馬は、関所の下役人山田幸兵衛の娘お袖に近づき、裏道の案内を頼む。股五郎の許嫁であったお袖だが志津馬の美貌に一目惚れし自宅へ連れ帰る。

志津馬は自分がお袖の許嫁沢井股五郎であると偽り、まだ股五郎に会ったことのない山田一家は喜ぶ。

ちょうどその頃、志津馬を助ける唐木政右衛門も関所を破り危うく捕えられそうになったところを、その武術の腕前を見込んだ幸兵衛に連れられ山田家を訪れる。語り合ううち政右衛門が少年時代、庄太郎と名乗っていた頃幸兵衛の弟子であったことがわかり、幸兵衛はこの庄太郎が剣客で知られた政右衛門であることに気付かないまま、娘婿股五郎のため政右衛門に助太刀を頼む。

そこへ政右衛門会いたさに郡山を出た元の妻お谷が、生まれたばかりの子を連れ巡礼姿で岡崎を訪ねる。降りしきる雪に凍え、積の痛みに苦しみたままたま通りかかった山田家で宿を乞うが、政右衛門は自分の正体が知られるのを恐れ、赤子だけを家に上げお谷を立ち去らせる。しかし、その後幸兵衛の妻が赤子の懐から政右衛門の子巳之助であるという書きつけを見つける。発覚を恐れた政右衛門は赤子の首をもはね切ってしまう。幸兵衛は政右衛門の目に浮かんだ涙を見てその本心と覚悟を知り、股五郎の行方を教える。一部始終を知ったお袖は尼となる。

■ もふもふ是から何方へも やります事じやござんせぬ

「いつ迄も爰に居て、可愛がつて下さんせ。」
志津馬にぞっこのお袖は、敵の股五郎になりすました志津馬と親公認のもと、晴れて夫婦になれることに大喜び。家の奥で睦みあう二人がシルエットに。

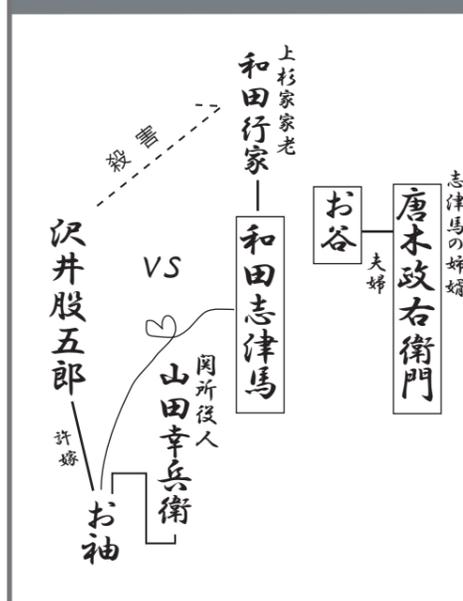
■ やわらかに云て引出す糸車

糸車を引く幸兵衛の妻。その姿は浄瑠璃の原作にも幾度か登場しますがここでは奥の娘お袖と志津馬の様子の方が気になるよう…。

物語る小道具-1

幸兵衛が旅先で貰った煙草。「この天気は斯して置たら湿りましょ留守事に刻んで見せませう。幸爰に切台包丁。」という政右衛門のせりふ通りの小道具。

伊賀越道中双六 主要登場人物



政右衛門が妻をさとし「苦しく共こたへて、一丁南の辻堂迄、這ふてなり共行てくれい」といったその辻堂が背景に見えています。



■ たしなむ大太刀差しこなす
庄屋から急用で呼び出される幸兵衛。奥にいる志津馬のことを妻に固く口止めし「関破りの詮議で有ふ」と言いながら羽織を引っかけ大太刀を差し、出かけてゆきます。

■ ヤイ軒下に何で寝るのぢや!

お谷親子を怪しむ関所の番人。その風情に同情しながら、好色あらわに「エ、見れば見る程此令なゑい女房、一人寝さすは残念なけれど、此方も寒気にどぢられ、瘦畑の鬼灯で、あったら物を見遣す事。」とぼやきつつ去ってゆきます。

物語る小道具-2

番人が掲げる提灯のよく見ると絵金が晩年に使った画号「雀翁」の文字が。こうした隠し落款も絵金がよく用いたいたずらの一つ。

■ 子の顔を夫に見せたい一心に。

「幼い者を連れだ巡礼でござります。お情けに小宵一夜さ、お庭の端に。」寒さと積の痛みに耐えかね、宿を乞うお谷。「この子を夫に渡す迄は、生きて居たい死にともない」といいながら門口で気絶してしまいます。

■ コリヤ何もいふな。

敵の居所を聞き出す絶好のチャンスに元妻が現れ驚く政右衛門。「此屋の内へ身共が本名、けぶらいでも知されぬ大事の所、其方が居ては大望の妨げ…氣をしつかり張詰て、必ず死るな。サア早ふ行々」

雪に寒雨にうたるゝつらさは骨にこたゆれ共、
旦那殿や弟が、敵を尋ぬる辛抱は、まだまだこ
んな事では有まいに…*1。



【参考文献】
*1『海音半二出雲宗輔傑作集』有明文庫
*2『歌舞伎登場人物事典』白水社 2006年5月
*3『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
*4『絵金蔵収蔵品目録』赤岡町 2005年2月
*5近森敬夫『絵金流本』香南市商工水産課 2006年3月 改訂版